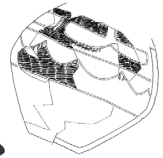




洞窟の考古学



～ 考古学の視点から洞窟を探る ～

洞窟における考古学の魅力

小野寺 秀和 (ONODERA, Hidekazu) ※

はじめに

洞窟は古くから人類によって利用されてきました。住居として、墓地、祭祀の場、あるいは保冷庫代わりなど多岐にわたり、中には人里離れた山深いところにある洞窟が博打場や盗人の隠れ家に使われた例もあります。それらの痕跡の多くは洞口付近に残されていますが、中にはフランスの「ラスコー洞窟」やスペインの「アルタミラ洞窟」の壁画のように、真っ暗な洞窟深部から発見された例もあります。

洞窟が人類に利用されてきた理由として、周囲を岩に囲まれ雨風を防ぎやすく外敵から身を守りやすい上、気温が安定し夏涼しく冬は暖かいなど、洞窟の持つ特殊な環境があります。しかし、住居として使われた洞窟には、さらに次のような共通点があります。

広い洞口を持ち、南向きで日当たりがよいこと。近くに水場があり、洞口前に平らな前庭部を持っていることなどです。

ここでは自身の体験を例に、洞窟における考古学の魅力とケイビング時の留意点について述べます。



「行者穴」の岩陰部

日本の洞窟遺跡

今、洞窟の考古学は南の洞窟が熱い。

鹿児島県沖永良部島の「大山水鏡洞」では、洞窟深部で発見された古い人骨の搬出に成功し、沖縄県

南城市の「武芸洞」では、人骨や獣骨とともに約6000年前(縄文時代前期)の爪形土器と思われる土器片が出土しました(詳細は、今特集の特別寄稿P17～21でお楽しみ下さい)。

そもそも、日本に洞窟遺跡は一体いくつあるのか? 私は数年前から洞窟遺跡の拾い出しを始めました。まず初めに地元の図書館に足を運び、県教育委員会発行の『静岡県遺跡地名表』を調べました。都道府県によっては、『遺跡分布地図』や『遺跡地図』などの表記のものがあるようです。こうした遺跡一覧の中の遺跡の「種別」が「洞穴」と表示されたものを拾います。

次に、考古学関連書籍の遺跡シリーズなどの見出しを調べ、さらにインターネットで徹底的に検索した結果、現在までに437箇所の洞窟・岩陰遺跡をリストアップすることができました(<http://www.doukutu.co.jp/sc7-8.html> 参照)。

しかし、洞窟や岩陰から土器や石器のといった遺物が採集されながら、遺跡として登録されていないものも数多くあるようです。また、洞窟(洞穴)遺跡と岩陰遺跡の区分が明確にされていない点にも、注意が必要です。

それは、土器のかけらから始まった

今から32年前のある日のこと。「土器のかけらが拾える洞窟を知っているよ」と、近所に住む少年が言いました。

「なに、土器片?」考古学に興味のあった私には、それはとても魅惑的な話でした。

早速訪れた洞窟は、浜松市浜北区にある「堀谷洞」という鍾乳洞です。

間口8m、高さ3mの南向きの立派な洞口と奥行き15mほどのホールを有し、前庭部のすぐ前を小川が流れるという、洞窟遺跡としての好条件がそろっていました。

懐中電灯を手に洞窟内の狭い縦穴に体を滑り込ませると、目の前の堆積層に土器のかけらがツツン